九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[081] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10184

出版情報：語文研究. 81, 1996-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

鶴久著
『萬葉集訓法の研究』

「万葉集の研究は訓古注釈に始まり訓古注釈に終ると言っても過言ではあるまい」（本書28頁）という著者は、書籍のかたちでは『萬葉集』（森山隆氏と共編）『訳文萬葉集』という二著でみずからの訓読文を公にしている。今回上梓された本書では、そうした訳文に到達する過程の一部をまとめてうかがいしることができる。

全体は三つの章からなる。まず第一章「序論」では、「1．語法・構文法からの解読」「2．形容詞カリ活用からの解読」「3．義訓による解読」「4．対句による解読」「5．補読による解読」「6．漢文の助辞用法による解読」の六項目にわたって、著者のよりどころとする方法が実例とともに簡潔にしめされる。

それをうけた第二章「本論―文字用法に基いた訓法の研究―」では、「第一節　正訓文字の訓法　第二節　借訓仮名の訓法（一、古代日本語における母音脱落と借訓仮名／二、借訓仮名による清濁表記）第三節　義訓の訓法　第四節　漢文の助字における訓法（一、者字について／二、之字について／三、哉字・也字について／四、而字について）第五節　対句における訓法　第六節　補読における訓法」という構成のもとに、おおくの解読例が詳細にのべられている。そして、いずれの場合においても〈先行する注釈書や古写本の訓を、集中の類歌や類似句と照らし合わせ、疑念の存するものについてその当否を検討する。傍証とする例はできるかぎり萬葉集に求め、その際には巻ごとの文字使いの特性にも配慮する〉といった非常にオーソドックスな立場が貫かれている。そうした点において、本書の記述は〈萬葉集をいかによむべきか〉についての格好のテキストとなっているとも言えるのではなかろうか。

最後の第三章「あとがき―結びに代へて―」によれば本書出版の計画は二十年あまり前からあったようである。それが今日まで延ばされたのは、場当たり的な思いつきを安易に発表することを戒めてきた著者ならではの慎重さの結果であろう。列挙された既発表の関係論文も一九五四年から一九九四年にわたる41本にのぼる。著者みずからはこれを「牛歩の跡」とよぶが、牛歩なれども後世まで消えることなき跡である。

（一九九五年一〇月　おうふう　A5判　六一九頁　三八〇〇〇円）

目加田さくを著
『私家集論』二

『私家集論』一（平成三年九月）の続刊である。目次は次の通り。

(II)　親王・内親王・賜姓御子―一世
　　皇孫―二世　皇曽孫―三世　皇玄孫―四世
A恋愛歌人―所謂色好の系譜
　一　原「業平集」―「まどひ」の生
　二　原「平貞文集」―「すさび」の生
　三　元良親王集「色好」の生
B宗教にかかわる歌人―一世、二世

一　大斎院選子
二　守覚法親王・萱斎院式子内親王
三　遍昭―その悲壮と軽妙洒脱
四　斎宮女御徽子
C風雅・風流の皇系歌人
Ⅰ河原左大臣源融
Ⅱ西宮左大臣源高明
(Ⅲ)
宮廷歌人……皇系廷臣―二世、三世、四世
(一)(A)源公忠集（二世　光孝皇孫）
(二)(A)源宗于集（二世　光孝皇孫）
(三)(A)源信明集と中務集（三世、公忠男、光孝曽孫と二世敦慶親王女）
(四)(C)源重之集（清和帝曽孫・三世）
(五)(B)源順集（四世）
(六)(C)在原元方集（四世　平城帝―阿保親王―在原業平―棟梁―元方）
(七)(C)大江千里（平城系四世）
後記
前作に引き続き、皇統を軸として、平安朝の歌人たちを系統的に見通す目は、鋭く、かつ、歌人ひとりひとりにあたたかい。本書は、ともすれば個別の歌人、家集論に終始しがちな昨今の私家集研究に、新たな視座を与えてくれることになろう。
（平成七年十月　笠間書院　A5判　四三一頁　一五〇〇〇円）

中村幸彦・井上敏幸編（広瀬貞雄監修）『広瀬先賢文庫目録』

大分県日田市豆田は江戸の雰囲気を伝える町並みとして現在観光名所となっており、中でも魚町通りの広瀬資料館はその中心ともいえる存在である。展示室には広瀬家の家業であった掛屋時代の文物が陳列されて観光客の目を楽しませるが、同敷地内に広瀬先賢文庫があり、そこに豊後日田の文名を全国に知らしめた広瀬家代々の学問と詩情が眠っている事は、一般にはあまり知られていない。近世後期の漢詩人・儒学者広瀬淡窓（桃秋長男）は、私塾咸宜園を創設した人としても有名であるが、先賢文庫にはこの淡窓を含めた広瀬八賢、月化（宗家第四世）・桃秋（宗家第五世）・秋子（桃秋長女）・九兵衛（宗家第六世、桃秋次男）・旭荘（桃秋五男）・青邨（本姓矢野氏、淡窓養子）・林外（旭荘長男、淡窓養子）ら八人を中心とした自筆の日記・原稿類、名家よりの来信、蔵書等が夥しく保存せられている。

文庫創設の昭和四十四年以来、その貴重な資料群の全貌を明らかにする目録の整備が待たれたが、ここに待望の本書発刊が実現した。構成はⅠ「広瀬家蔵書目録」、Ⅱ「咸宜園蔵書目録」、「書名索引」とに大別され、Ⅰはさらに「家宝書」と「一般書」に分類して載録されている。その内容をごく簡単に紹介しよう。

「家宝書」は広瀬家代々の日記・自筆原稿類、著作物が中心で、遺愛本も多い。例えば著名な淡窓の『遠思楼詩集』、旭荘の『梅墩詩抄』等も草稿から刊行に至るまでの推敲過程を辿ることができ、今後の研究が期待される。「一般書」は広瀬家代々の蔵書で、漢籍類は

さることながら、歌・俳書類から読本類まで様々な分野の書物が偏りなく散見できる。広瀬家代々の学の広さと厚さを知るに十分であろう。「咸宜園蔵書」は塾の蔵書ゆえ儒学書・詩学書が中心であるが、明清時代の漢籍、いわゆる唐本も相当数見受けられる。

先賢文庫はその創設当初より、「淡窓・八賢の業績を一層研究したい特殊熱心家、及び学者・文人等々」(『文庫閲覧者心得』)へ向けて門戸を開いている。今ここに目録が完成し、広瀬家学の研究も新たな局面を迎えたといえよう。

(一九九五年一二月　広瀬先賢文庫・思文閣出版　A5判　二一七頁　七、二一〇円)

中野三敏著
『書誌学談議　江戸の板本』

本書は『新日本古典文学大系』付録月報に平成元年一月より同五年三月にかけて三十七回連載した「板本書誌学談議」をもとに、若干の加筆訂正を施し一書としたものである。

本書の構成を見てみると、序にあたる「板本書誌学のすすめ」に始まり、以下第一章「板本というものの性質」第二章「板式」第三章「書型」第四章「装訂」第五章「分類」第六章「板本の構成要素」第七章「板本の版面」第八章「本文の構成要素」第九章「刊・印・修」付論「板株・求板」と続き、更に巻末に鈴木俊幸氏による「板本書誌学関係文献目録」と索引を附したものとなっている。こうした構成からも分かる通り、本書では江戸時代の整版本に関するあらゆる事柄を網羅して取り扱っており、また各項の末尾に文中に出てくる書誌学用語について必要に応じて「用語メモ」を附すといった細かい点からも、本書がまず何よりも実際に江戸の板本に接する人々に益するものであることは一目瞭然である。著者自ら「あとがき」の中で、本書は文芸研究の補助技術としての、言わば「書誌術」とも言うべきものを取り扱っていると述べてあるが、文芸作品がほとんどの場合書物という形態をとって存在する以上、書物自体から可能な限り情報を読み取るこの「書誌術」は単に補助的であると言うよりもむしろ文芸研究に於ける基礎的技術とも言うべきものであり、本書はその技術を身につけるために好適の一書である。

しかし、本書の有する価値はそうした実用的側面にのみ限られているのではない。そもそも本書の根幹には著書の「作品が書かれ、発表されたその時点に立戻って、その意味を考える」、そしてそのために「物としてその時代を示してくれ」「それを手にとる事はまさにその時代を手にとる事」になる原本を重んじるという、研究者としてごく当り前の、しかしともすれば忘れられがちな姿勢がある。本書が単なる事項の説明のみに終らず、例えばコピーや本の分類といった問題に関する現状に疑問を投げかけているのも、そうした著者の姿勢から必然的に生じたものであり、文芸研究に携わる者全てが今後真剣に取り組んでゆくべき問題を提示していると言えよう。

基礎技術を身につける一方で、研究者としての姿勢を正す、まさに座右の書とすべき一書である。

(平成七年十二月　岩波書店　B6判　三五〇頁　三、〇〇〇円)